

ラハティポリテクニク学生作品交流展

宮崎雅司^(*)・林 暁^(**)

はじめに

平成14年9月25日(水)から10月8日(火)までラハティポリテクニク(フィンランド共和国)において本学の学生作品展を開催した。

本学は、開学以来産業造形学科及び産業デザイン学科学生による学習の成果を学内で発表展示してきた。また卒業研究・制作は、卒業制作展として学内展と富山市での学外展を開催し一般市民から高い関心と評価を得ている。

しかし、学生の作品を海外で展示するのは初めてのことであり、ラハティポリテクニクで作品展を実施するには作品の選定、ラハティポリテクニクとの開催要項や展示スペースの交渉、作品の輸送、搬出入および展示計画など検討しなければならない課題があった。以下、ラハティポリテクニクで学生作品展示に至るまでの経過を報告し、今後学生作品交流展を開催する際の方向性を示したい。

、作品展開催までの経緯

本学とラハティポリテクニクとの交流は、平成9(1997)年、友好協力協定の締結からはじまった。そして翌平成10(1998)年6月には、ラハティポリテクニクの学生の作品展を本学で開催する機会を得た。

この作品展には、産学共同開発によって製品化された作品やジュエリー、飾り棚や椅子などの卒業制作の作品67点が展示され、本学が目指している地域との連携のあり方や授業の進め方等に大きな刺激を受けた。また、同年学生交流の覚書を交わし、相互に交換留学生の派遣と受け入れを実施した。

ついで、平成13(2001)年12月にはラハティポリテクニクへ教務委員会、開放センター運営委員会合同での視察をおこない、教育方法や学生の交流、作品展の開催などについて意見交換を交わしてきた。そして平成14(2002)年1月、学生交流については改めて交換留学生を増員の覚書を交わし、それと同時に学生作品展の相互開催についての覚書を交わすこととした。

、作品展開催にむけて

本学開放センター運営委員会には、資料収集展示専門小委員会があり、この小委員会でラハティポリテクニクでの学生作品展開催に向け、学生作品の選定や開催時期等の検討にはいった。作品の選定にあたっては、平成13年度の卒業研究・制作及び専攻科の修了制作の作品の中から出品することとし、産業造形学科金属工芸・漆工芸・木材工芸の各コースそれぞれ10点、および産業デザイン学科から10点の合計40点を選び出すこととし、作品の傾向、スタイル、大きさ等は各

(*) 短期大学開放センター (**) 産業造形学科

コース及び学科の委員に委ねた。その結果産業造形学科金属工芸コースから10人の作品28点、漆工芸コースは10人の作品34点、木材工芸コースは9人の作品と共同制作の作品1点を含む27点及び産業デザイン学科からは9人の製品モデル21点と作品解説パネル21枚の合計131点をラハティポリテクニク学生作品展に出品することとなった。(図1)

ついで、開催時期を9月下旬としラハティポリテクニクと調整することとした。

平成14年5月、開放センター及び事業課では、ラハティポリテクニクでの学生作品展開催における出品作品のリスト、集荷の方法、保管、梱包、発送、作品搬入、陳列、搬出などに係るタイムスケジュールを作成した。(図2)

また、作品の輸送を船便にすることとしたが、船便にすると発送からラハティポリテクニクに到着するまで約2ヶ月を要することもわかった。しかしながら、漆工芸の作品は2ヶ月間の船便のあいだ、どのような不測の事態を引き起こされるか予想もできず、保証もできないとのことで急遽航空便に切り替えた。

7月、ラハティポリテクニクの児島先生から会期を9月25日から10月8日とするとの回答とともに、ラハティ市シベリウスホールにおいてシベリウス・フェスティバルが開催され、その期間内に日本人建築家隈研吾氏の授賞式が予定されており、そこに高岡短大学生の作品を展示したいとの申し入れを受けた。ラハティでの作品発表の機会が増えることでもあり申し入れを受け入れることとした。

シベリウスホールにおけるシベリウス・フェスティバルは、9月19日から22日まで開催され、その期間展示することにした。

、展示

(1)シベリウスホールの展示

9月18日、シベリウスホールで展示を行った。陳列には、林と高岡短大からの留学生柳原、吉行、齋藤の4人があたった。児島先生からの「なるべく日本的な雰囲気を持っている作品を展示したい」との要望により、漆工芸の作品と金属工芸の作品の中から、特に日本の伝統的な技法を使って制作された作品を選んで展示することとした。この期間には、多くの市民が鑑賞に訪れ、特に漆工芸の作品は関心が高く興味を持ったようで、「これは何でできているのか」「どのような方法で制作するのか」「これは何に使用するのか」などの質問があった。また、「この展示を他の都市で開催できないか」との発言もあって、シベリウスホールでの展示は大きな成果をあげた。

(2)ラハティポリテクニクの展示

9月25日は、朝8時からラハティポリテクニクで展示陳列を行った。この陳列作業には、児島先生と林、宮崎それに3人の留学生柳原、吉行、齋藤があたった。展示会場は、本学の展示室の約3倍の広さを持つデザイン学科の展示室が予定されていた。早朝からの作業は、まず13個の梱包ケースから作品を取り出し、1点1点の作品と写真とを照合することから始まった。この作業は、時間を要する根気のいる作業であった。厳重な梱包による131点の作品の荷解きが終わったのは午後1時頃であった。

児島先生には、事前に作品のファイルが送っており、そのファイルにもとづいて展示レイアウトが作成されていた。そのレイアウトに従って展示台を設置し、そこに作品を展示した。金属工芸、漆工芸、木材工芸の作品の展示は、比較的短時間で完了したが、デザイン学科の作品は製品モデルと解説パネルとがあるので壁面の使用と展示台の大きさと位置に考慮が必要となるため展

示に苦労した。

展示は、午後6時ころに終了した。続いて午後6時30分からデザイン学部長ほか数名の教員の出席のもと開会式を行った。開会式では、ラハティポリテクニクで本学学生作品の展示を開催許可されたことに対する謝辞ならびに本学学生の作品についての講評をお願いした。

デザイン学部長からは、1998年に高岡短期大学で開催したラハティポリテクニクの学生作品展のお礼と今回の作品展の講評、ならびに次回は高岡短期大学でラハティポリテクニク学生作品展を開催するとの発言があった。その後、作品の解説を行ったがラハティポリテクニクの教員には、漆工芸の作品に大きな興味をもたれたようで、制作過程や技法、使用方法などについての質問があった。また、金属工芸や木材工芸の作品のうち日本的な作品と思えるような作品の制作意図や使用方法についての意見も求められた。

ラハティポリテクニクでの本学の学生作品展のためのポスターは、児島先生が作成されたものであり、ラハティ市内各所に配布し掲示をお願いした。(図3)

、おわりに

今回の学生作品展は、ラハティポリテクニクの教員や学生に本学の教育内容の一端を紹介できたことは大きな成果であった。しかしながら、本学にとって海外での作品展示は初めてのことであり、どのような評価をうけるのか見当がつかなかったのも事実である。したがって、展示作業にあたっては、より日本的な技法を使って制作された作品をメインに展示することになった。

ラハティポリテクニクでの意見交換や質問から考えられることは、我々日本人には一般的な製品であっても特殊な空間で使用される製品や生活用具は、生活から遊離しているように感じられるようで、説明が困難であった。

また、デザイン学科の作品のコンセプトパネルは、英語版のパネルだけで十分だと思われた。ラハティポリテクニクでは、日本語のパネルを展示しても読む人がいないので意味をなさないことにも気付かされた。

今回は、産業造形学科各コースおよび産業デザイン学科からそれぞれ10人ずつの作品を選定した。これは公平さを求めることとすべてを平等にすることからの発想であるが、展示したときの全体のインパクトに欠けるように思えた。したがって、次回の作品展示ではテーマを設定し、そのテーマに沿った作品を選定し展示するほうが、ラハティポリテクニクの教員や学生に理解されるのではないかと思われる。

12月10日、ラハティポリテクニクでの展示作品が無事搬出されてきた。

最後に、この企画を実施するに当たって事業課課員には大変な苦労をかけた。初めての試み初めての経験で、作品には細心の注意を払い、作品がフィンランドに着いてからの児島先生との交渉と気持ちをやすめる間のなかったのではないかと思います。ここに深く感謝いたします。

(図 1) ラハティポリテクニクとの学生作品交流展 出品リスト

産業造形学科

(金属工芸コース)

| 出品者名 | 作 品 名 |
|--------|--------------------------|
| 山下 真守美 | 明日も生きていたい そんな世界に住もう(19個) |
| 山本 愛子 | 花器 |
| 菊原 千寛 | 花器 |
| 藤田 愛子 | 鐘 |
| 口池 晴子 | 香炉 |
| 平田 麗花 | りんごのお菓子箱 |
| 喜多 章江 | おぼん |
| 吉田 展子 | ねむの木 |
| 福田 公子 | ランプシェード |
| 本多 里絵 | 自画像 |

(漆工芸コース)

| 出品者名 | 作 品 名 |
|--------|-------------|
| 池内 郁美子 | 螺鈿小筆筒 春草花 |
| 関根 彩香 | 乾漆盛器 |
| 田中 美夜 | 乾漆合子「実」 |
| 大西 章寛 | ふるさと |
| 見浦 沙耶子 | 乾漆小箱 蝙蝠 |
| 村山 郁美 | 乾漆紫陽花蒔絵合子 |
| 小川 太郎 | 乾漆食籠 |
| 小西 明日香 | 日々草蒔絵宝石箱 |
| 米道 幸絵 | 乾漆菊形盛器 |
| 田村 明恵 | 紙胎編組銘々皿・鉢・盆 |

(木土工芸コース)

| 出品者名 | 作 品 名 |
|--------|-------------------------|
| 秋岡 洋平 | ステンレス、木材を使った室内用植木鉢の制作 |
| 近堂 美聡 | 積み木箱 |
| 平川 大 | 漆風呂 |
| 池田 篤史 | ガラステーブル |
| 中田 ゆかり | combination |
| 浜谷 美代 | シーズニングケース |
| 大銀 木都絵 | キャンドルスタンド |
| 勝戸 華江 | 4つのいす |
| 柳原 裕子 | ろっきんぐ・ざ・いす |
| 学生共同製作 | エントランスホールに設置した椅子2とテーブル1 |

産業デザイン学科

| 出品者名 | 作 品 名 |
|--------|---------------|
| 奥村 保子 | 幼児のための遊具 |
| 黒崎 裕美子 | 京極夏彦ブックデザイン |
| 鯉野 貴成 | 言葉が化ける、新しい本の形 |
| 斗沢 佑香 | Bag |
| 中谷 圭井子 | Bath+fun |
| 名越 恵美 | 時間を目で感じるカレンダー |
| 山形 明子 | plus |
| 土肥 匡晴 | 携帯電話 |
| 鍛冶 麻央里 | IKI |

(図2) ラハティポリテクニクとの学生作品交流展 タイムスケジュール

| | |
|-------|---|
| 5月23日 | 資料収集展示専門委員会 <ul style="list-style-type: none"> ・ 出品作品の再確認（変更がある場合は5月28日までに再提出） ・ 作品返却時の宅配便利用作品の確認（在校生を除く） ・ 開催日時について ・ 教員派遣について ・ 英文作品解説（キャプション）原稿の作成について |
| 5月28日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 出品リストの再提出期限 *再確認後のリスト変更不可 ・ 事業課への出品作品提出期限 ・ 作品返却時の宅配便利用作品リスト提出期限（住所・氏名・電話番号を明記） |
| 5月30日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 役務実施協議書および仕様書の作成・提出 （仕様書提出後の作品変更等は絶対にできない） <p>運送業者選定手続き</p> |
| 6月上旬 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ラハティポリテクニクと開催日時・教員派遣等について協議 |
| 6月10日 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業課へ英文作品解説（キャプション）原稿提出期限 |
| 6月中旬 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ラハティポリテクニクへ英文作品解説（キャプション）原稿提出 |
| 6月下旬 | 運送会社の決定 <ul style="list-style-type: none"> ・ ATAカルネ手続き（1ヶ月を要する） ・ 梱包手続き ・ 輸送手続き |
| 7月下旬 | 輸送（船便は2ヶ月を要する） |
| 9月下旬 | ラハティポリテクニクへ作品到着 ラハティ展開催（2週間程度） |
| 10月中旬 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 梱包手続き ・ 輸送手続き <p>輸送（船便は2ヶ月を要する）</p> |
| 12月下旬 | 大学へ作品到着 作者への返却手続き（宅配便利用作品 宅配便手配し返却） （上記以外 各学科、各コースへ返却） |



9/19 ~ 9/22まで展示会場として使用したシベリウスホールの外観



ラハティポリテクニクでの展示風景



シベリウスホールの内観、フィンランドで最大の木筋建築である 正面の壁の向う側がコンサートホールである



ラハティポリテクニクでの展示風景



シベリウスホールでの作品展示風景
場所の都合と児島先生の意志で日本的な作品が選ばれた



ラハティポリテクニクでの展示風景



インダストリアルデザインの学生に対し、林暁の漆工芸に関する特別講義風景



ラハティポリテクニク インダストリアルデザイン科の校舎外観